
転生者は原作ブレイクしました

ダークサイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者は原作ブレイクしました

【Nコード】

N0909Y

【作者名】

ダークサイド

【あらすじ】

趣味嗜好がイタイ以外普通の男性が女神様の姉の気まぐれで殺された、彼は女神から提案された特典でFateの世界に女性になって転生した。彼女は原作に介入するのかそれとも原作ブレイクするのか？

プロローグ（前書き）

この小説は二次創作品になります、そのため原作とは違う展開、オリジナル要素が含まれます、ご注意ください。

プロローグ

ある日、私の世界は終わりを告げた。私はその日がくるまでは普通の男性だったのに……。

あれは職場から帰る途中だっただろうか、目の前に歪んだ空間があった。

康行「あれ、疲れてるのかな？」

康行はそんなことを思っていた。それが康行の最後の記憶だった。次に康行が目覚めると霧の中のような場所に立っていた。

康行「えっ、なんでこんなところに居るんだ？ 職場から帰る途中だったはず。」

女神「気がつきましたか？ 康行君。」

いきなり声をかけられた、康行は声のした方にふり振り返る。そこには綺麗な女性がいた。

女神「先に謝っておくわ、ごめんなさいね。」

康行「なぜ謝る？」

女神「実は、私の姉が気まぐれであなたをその、殺しちゃったの。」

康行「嘘だろ。俺をからかうの止めてもらえないだろうか？」

女神「嘘じゃないんです、あなたが最後に見た者は姉の使い魔なの。」

女神いわく、あれは俺がいた世界では死神と言われていることだった。

女神「でね、そのお詫びにあなたに二度目の人生を上げるわ。」

女神「で、あなたの趣味嗜好を覗かせてもらったんだけど。」

そこで急に赤面する女神、今、この女神なんて言った・・・？

俺の趣味嗜好を覗いた・・・そして赤面してる。ヤバイ、非常にまずい。

女神「・・・イタすぎますね、この変態。あなたの股間を私の足で踏んであげましょうか？」

康行「いえ、結構です、女神様。」

女神「クスッ、冗談ですよ。」

康行「女神様、冗談きついぞ、それはいいとして、なんか特典はないのか？」

女神「特典ですか、じゃあ。」

女神はにこりと微笑むとこういった。

女神「あなたの行きたい世界、能力、性別を選択させてあげます。」

女神の提案は実に素晴らしいものだった。俺は行きたい世界にFemaleの世界、能力にアーチャーの投影魔術、固有結界、膨大な魔力を貰った、性別は女にしてみた。

女神「わかりました、では二度目の人生楽しんでね。機会があったらまた逢いましょう。」

女神「あつ、あなたの家にプレゼント用意してあるからね。」

女神がそう言った瞬間景色が変わり康行は転生者になった。

プロローグ（後書き）

はじめまして ダークサイドです。初めて書きますので読みにくかったりするかもですが、よろしく願います。

今回は康行についてです、

年齢29歳、髪は黒の短髪です、まあこのへんで、彼もう死んでるんで……。

康行「作者よ現実では私は生きてるぞ。」

ダ「康行どこからこの世界に。」

康行「作者よ俺の設定はあなた自身なんだから、名前こそ違っけどね。」

作者「忘れてた……。」

康行「という訳で、読者のみなさんよろしくね」

な、なんでこうなるの。(前書き)

どうも作者です、今回から本編スタートです。まあ何か変な展開になりそうですが、よろしくお願いします。

な、なんでこうなるの。

深山町の一角にある日本家屋の前に私は立っていた。表札には星村と書いてあった。

ここが女神が用意してくれた家のか？とりあえあず入ってみることにした。

玄関の引戸を引いてみるガラガラと音をたて引戸が開いた。無用心極まりない、私は思った。

女神「おかえりなさいませお嬢様。」

玄関先になぜかメイド服を着た、女神が立っている。

女神「あら、こういうシチュエーション嫌いだった、千夜ちゃん？
千夜？誰のこと、私が悩んでいると、女神がこう言った。

女神「あつ、ごめん、わからないわよね。あなたの新しい名前よ。
星村千代がフルネームね。」

女神からの補足によると、年齢は16歳に若返っているらしく、穂群原学園の二年へ編入手続きが済んでいるらしい。

千代「また、高校に行くことになるなんて。」

私がため息をついていると背後に気配を感じた。女神がいつの間にか後ろに立っている。

女神「千代ちゃん可愛いわよ、お姉さんがいろいろ教えてア・ゲル。」

千代「ちよつ、どこ触ってんのよ、この百合女神。」

私が女神を払いのけようとしていると、女神に押し倒されて頭をぶ

つけてしまった。

千代「痛いじゃないのよ、あれ、居ない？」

女神「千代ちゃん、またね、次は逃がさないからね。」

女神はそう言い残すと時空の歪に消えていった。私は半分呆れながら家の居間へと入って行った。

そこには千代ちゃんへと書かれた、衣類ケースと穂群原学園の制服、通帳が置いてあった。

衣類ケースを開けるとそこには女神からのメッセージと私のための服が入っていた。

・千代ちゃんへ・

当面の服と生活費をプレゼントしとくわね。変なワカメには気を付けてね。

そこでメッセージは終わっていた。ワカメ？まさかあいつのことかな？私の頭にはワカメ髪 of 嫌味な奴が浮かんでいた。

女神の先程の行動から変な服が入ってるのではと思ったが、いかにも女子高生らしい私服が用意されていた。通帳に目を通すとそこにはびっくりする額が記載されていた。

千代「1億！！、生活費よね、これ？そういえば服もブランドのものが多かったような。」

こうして私の第二の人生が始まった。

千夜「さて、何しようかな？お隣さんに挨拶にいかなくちゃ。」

私は女神の用意した服に着替えると、家を出た。大きな武家屋敷の門の前に立ち表札を確認する、衛宮と書いてある……。少し考えてると後ろから声をかけられた。

士郎「家に何かようかな？」

後ろを振り向くと、衛宮士郎が立っていた。この世界の主人公だ。

千夜「初めまして、隣に越してきた星村千夜です。」

士郎「こちらこそ、よろしく。星村さん。衛宮士郎です。」

千夜「私のことは千夜と呼んでください。衛宮さん。」

士郎「じゃあ俺のことも士郎と呼んでくれて構わないよ。」

千夜「ふふ、そうさせてもらいます、士郎。では失礼します。」

私は挨拶を済ますと早々に衛宮邸を後にした。私は家に戻り認識障害の結界を家に張った。

千夜「これでいいかな。まさか隣に主人公が住んでるなんて思わなかったわ。」

ピンポン、玄関でチャイムが鳴った。私は急いで玄関へ向かった。

千夜「はい。どちら様ですか？」

返事がない、まさか、魔術師であることがバレたのだろうか、完全に魔力は隠してたはずなのに。

警戒しながら玄関を開けるとそこには、何もいなかったが、先程までたしかに誰かがいた痕跡があった。

千夜「おかしいわね、絶対誰かいたのに。」

私が不思議に思っていると、上から何かが襲ってきた。間一髪、左に避けると、先程まで私がいた空間を何かが切り裂いた。戦うしかないかと思った瞬間、士郎が何かをもってやってきた。

士郎「千夜、これ良かったら食べないか、作り過ぎちゃってさ。」

千夜「危ない、避けて」

士郎「えっ、何をだよ。」

士郎がつぶやくとほぼ同時に何かが肉を貫く音がした、ザシュ……。

士郎「えっ、なんでさ」

士郎がお決まりの口癖と共に口から血を吐き倒れる、腹部に損傷があるようだが致命傷ではないようだ。

既に何かはここから完全に立ち去ったようだった……。

千夜「なんてタイミングでくるのかしら、士郎は……」

千夜「治癒魔術使えないのに、あれを使うしかないか。」

千夜「トレスオン同調開始」

私はある程度の過程のみ行い「アヴァロン全て遠き理想郷」を投影した。

千夜「アヴァロン全て遠き理想郷」

私は真名をつぶやきそれを士郎の傷口に当てた。効果があつたのか傷は完全に癒えたようだった。

次の瞬間、アヴァロン全て遠き理想郷は砕け散った、投影する過程を端折ったからだろうか。

士郎「うっ、千夜、大丈夫か？あれ傷が消えてる？」

千夜「私は大丈夫よ、士郎の傷はいつの間にか治ったみたいね。」
私とはげながら答える、士郎はまるで狐にでもつままれたかのような顔をしている。

千夜「で、何を持ってきてくれたのかしら？」

士郎「肉じゃがだよ、つくりすぎたからさ……」

士郎の後ろに肉じゃがの入った容器が無残な状態で転がっている。しばしの沈黙のあと、士郎はつぶやいていた。

士郎「なんでさ、俺の力作が……」

千夜「また今度ご馳走になるわ、士郎」

私がそういうと士郎は頷き隣の衛宮邸へ帰っていた、私はというと先程の襲撃者について考えていた、まだ聖杯戦争は始まってないはずだし、死徒もない世界のはずなんだけど……女神に聞いてみよう。

千夜「色ボケ女神聞こえる？」

女神「千夜ちゃん非道い、誰が色ボケよ？」

千夜「あんたよ、あんた。聞きたいことがあるんだけど？」

女神「何かしら？」

千夜「さっきの襲撃者はなんなの？」

女神「死徒よ。ここは型月作品すべての世界に繋がっちゃたの。」

千夜「えっ、何故？」

女神が言うには私が転生したとき使った儀式魔術の力が強大過ぎ並行世界の境界を破壊したらしい。おまけに女神が術式を間違えたためらしい……。

女神「ごめん、千夜ちゃん。機嫌なおしてよね。」

千夜「はあ、あんたは赤い悪魔か？」

女神「非道いわ、私はあそこまでうつかりを発動させないわ。」
私は心の中で似たようなものだと思った。

千夜「まあ、いいわ、済んだことだし。」

私がそういつと女神は急に笑顔になり、いきなり私の唇を奪った。

女神「千夜ちゃんの初めて奪っちゃった（笑）」

千夜「この色ボケ女神、私に百合属性はないわよ。今はノーカウ
ントなんだからね。」

女神「えー、つまんない。」

女神のボヤキを無視しながら私は詠唱を始めた。

千夜「体は剣で出来ている、血潮は鉄で、心はガラス、」

女神が周辺の変化に気づいたのかいきなり叫び出した。

女神「千夜ちゃん、待って、もう二度としないから許して、お願い。」

千夜「次やったら、死んでもらうからね、たとえ女神でもね」

女神「わかったわよ、約束する。」

女神はそう言つとそそくさと時空の歪に消えていった。

な、なんでこうなるの。(後書き)

作者です。今回は千夜について解説します。

名前 ほしむら 星村 ちや 千夜

年齢 16歳

穂群原学園の2年生、今後弓道部に引き込まれる予定。

ちなみに胸はCカップぐらい。背後に立たれるのが嫌い(女神のせい)

転生前の記憶はそのまま残っている。

作者「さて、次回予告」

千夜「ねえ、作者さん、」

作者「千夜ちゃん、いつ来たの？」

千夜「さっきからいたわよ、なんか、チートが付いてるんだけど？」

作者「あつ、忘れてた、詳しくは次回、女神に聞いて。」

千夜「はいはい。今回はワカメがスープになります。」

作者「そこ、嘘予告をしない」

次回予告

あるはずだった世界はとある事情で壊れていた、死徒の出現、隠されたチート能力、突如現れた、虎聖杯、入り乱れる型月キャラ、暴走する冬木の虎VS千夜。

千夜「私を怒らせたわね、死になさい。」

壊れた世界の始まり（前書き）

前回予告にて明らかになった追加された千夜のチート能力とは？

壊れた世界の始まり

ジリリリリン、目覚まし時計が派手に音を立てている、もう朝なんだろうか。

千夜「ん、もう朝なの？やばっ、遅刻する。」

千夜は飛び起き、急いで穂群原学園の制服に着替える。朝食にカロリーメイトをくわえながら、家を出た、千夜が学園に向かい走っていると、前方に士郎が歩いている。

千夜「おはようございます、士郎。」

士郎「えっ、千夜じゃないか、おはよう。」

士郎「うちの制服を着てるってことは、編入してきたのか。」

千夜「ええ。」

話しているうちに学園についた、そこに偶然なんだろうが、嫌味なワカメがいた。

ワカメ「よう、衛宮、朝からお熱いことで。」

ワカメが士郎にイヤミを言う、そして私に話しかけてきた。

ワカメ「君さ、こんな奴と一緒にいるより、僕と一緒に、ぐえ。」

千夜「話しかけないでくれるかしら、ワカメさん。」

私はワカメに返答しながら金的蹴りを食らわした。悶絶しながら蹲るワカメを通り過ぎ、私は士郎に聞いた。

千夜「職員室はどこかしら？」

後に士郎は語っている、あの時の千夜の笑顔は赤い悪魔のようだったと。

士郎「案内するよ。」

私は士郎に案内され職員室に行き、自分のクラスや担任を確認したところ、士郎と同じクラスになっていた。そして、藤村先生が来るのを待っていた。

大河「ごめん、お待たせ、星村さん。」

私は藤村先生と共に教室へ行き、クラスメートに自己紹介をし、席は士郎の隣になった。

それからはクラスメートから色々と質問攻めにされ、あっという間に放課後になっていた。

士郎は弓道部にまだ在籍しているようで顔を出すと言って弓道場に消えて行った。

私は帰ろうと校門に向かうとワカメが待っていた、何か言いたそうにしている。

ワカメ「朝はよくもやってくれたな。」

叫びながら殴りかかってくるワカメ、私はそれを軽く受け流し、ワカメを蹴り飛ばす。

千夜「女に手を上げるなんて最低ね、ワカメ。」

鳩尾に蹴りを食らったワカメだが、立ち上がってきた。手に魔術書のようなものを持っている。

ワカメ「ライダー、来い。」

私は驚いたまだ聖杯戦争は始まっていないはず、それにワカメがライダーを学園で呼ぶのはもう少し先のはずだった。そんなことを思

っているうちにライダーが現れていた。それと同時に鎖のついた短剣が飛んでくる。

千夜「トレスオン同調開始」

私はそう詠唱すると黒鍵を投影した、激辛麻婆が好きな神父が得意とする武器だ。

ワカメ「な、どこから出した、ぐえっ」

私はライダーではなくワカメに向け黒鍵を投擲していた、そのうちの一本がワカメに当たったようだ、黒鍵の鉄鋼作用で吹き飛ぶワカメ、ライダーがワカメの元に駆け寄る。

ライダー「大丈夫ですか、マスター」

ワカメ「ライダーなにやってる、あの女を殺せよ。」

どうやら私を殺す気らしい。

千夜「そう、なら私も本気で相手してあげるわ。覚悟はいい、ワカメとライダー！」

千夜「I am the born of my sword（我が骨子はねじれ狂う）」

私が詠唱し終わると、あの錬鉄の英雄が使っていた黒い洋弓と偽・螺旋剣が投影された。

私は矢を番えるとライダーたちに向かい矢を放った。

ライダー「逃げてください、マスター。」

ライダーがワカメに告げるが遅い。

千夜「ブロークンファンタズム（壊れた幻想）」

私がつぶやくと同時に偽・螺旋剣が持つ膨大な魔力が開放され、辺り一面を吹き飛ばした。

千夜「殺ったの？」

当たりを見回すと肉の焼ける臭いがしてきた、ワカメは死んだようだがライダーが見当たらない。

少し先にライダーを見つけた。半身がボロボロだが生きているようだ。

千夜「トレスオン同調開始」

私はハルペーを投影しライダーの首めがけて投擲する、ライダーは躲すことすらできず首を落とされた。そして、無に帰っていく。私は誰にも見られてないことを祈り、急ぎ帰路についた。

私は帰宅するとテレビを付けてみた、私が起こした爆発は学園に大損害を与えたいが、死者はワカメのみで、負傷者などは居なかった、不幸中の幸いだ。

女神「千夜ちゃんいる？」

いきなり女神が目の前に出てきた。この女神暇なんだろうか？と訝しんでいると。

女神「暇じゃないわよ、千夜ちゃんにつたえわすれたことがあって」。

女神が言うには私に後から付与したチートがあるらしく、説明に来たらしい。

女神「まず、ランクA以下の攻撃は無効になるわ、次に無詠唱での魔術行使が出来るわ、宝具クラスの真名開放や固有結界は使えないけどね、最後にこれは取って置きよ近接格闘のランクがSクラス　　になってるわ。」

女神「セイバーにも勝てるわよ。」

流石に私も驚いた。これなら英霊抜きで聖杯戦争に勝てそうだ。

千夜「そういえば、今日ライダーとワカメを始末したわ。おかげで学園は休校になったけどね。」

女神「忘れてたわ、聖杯が現れたの。」

女神が言うには今までの聖杯戦争の聖杯とは違うらしいが願望器であることは間違いないらしい、いきなりの出現だったため、魔術協会や麻婆神父も気づくのが遅れたらしい、もちろん間桐以外の魔術師たちもだが。さらに今回は英霊抜きでも参加可能らしい、それを聞いた私は女神に告げた。

千夜「聖杯戦争に参加するわ。」

言峰「ここに聖杯戦争の開始を宣言する。さあ聖杯を求め殺し合え。」

翌日私は言峰教会で麻婆神父の宣言を聞いていた。今回は魔術師や召喚されてない英霊たちも受肉しているためかなりの参加者がいるようだ。それだけ強大な力の聖杯なんだろう

参加者

真祖の姫君、英雄王、両義 式、遠坂 凜&英霊エミヤ、ランサー&バゼット、士郎&セイバー、ロリブルマ&バーサーカー、女神が調べてくれた参加者たちだった。

壊れた世界の始まり（後書き）

どうも作者です、さて何故か千夜が言ったようにワカメ居なくなりましたね。

千夜「当然じゃない、あんな雑種。」

作者「あの千夜さん金ぴかみたいなこと言わない。」

千夜「あら、偶然よ偶然。」

作者「ひい、千夜さんその後ろに浮かんでる無数の剣しまつて。」

千夜「仕方ないわね。」

千夜「ところで作者、今回の聖杯はなんなの。」

作者「あれは、冬木の虎が自分専用シナリオが欲しいと言って願ったら。現れた虎聖杯だよ。」

大河「虎って言うな。」

作者「噂をすればなんとやら。」

千夜「ほんとね、後書きに出てこれるなんて真祖の姫君もびっくりの妄想具現化ね」

大河「うるさい、外野共、次回からは虎聖杯戦争開始よ。」

千夜「外野ですって？」

千夜「本編でどうなるか覚えときなさいよ、冬木の虎」

大河「虎竹刀のサビにしてくれるわ。」

作者「次回、死闘開始、よろしくね。」

最強の敵！？（前書き）

もう4話目ですね、文章力ないため読みにくいかもしれませんがよろしく願います

最強の敵！？

昨日開始が宣言された、虎聖杯戦争、まだ、大規模な戦闘は行われてないようだ。

千夜「女神、そういえば、あんた、名前あるの？」

女神「名前は忘れちゃった。」

千夜「私が付けてあげるわよ、呼びづらいし。」

女神「千夜ちゃん、優しいのね。」

女神は喜んでいるようだ。さて、なんて呼ぼうかな。

千夜「アリスなんてどう、あんた、可愛いんだし。」

アリス「それでいいわ、千夜ちゃんが呼びやすければ。」

アリス「名前をくれたお礼に、これあげる。」

アリスが時空の歪に手をつ込み何かを取り出した。

アリス「これは、一見するとただの日本刀だけど、魔力を通すとなんでも切れる概念武装よ」

アリスは概念武装と言うが、どう考えても神造兵器だと思う。それにそんな日本刀聞いたことがない。

アリス「これは、私が作ったオリジナル武器だから。」

千夜「チートよね、それ？投影もできるの？」

アリス「そうとも言っわね。投影できるわよ。」

アリスが言うには、これ自体の存在そのものは宝具に近くランクはA+になるらしい、真名は私が自由につければいいとのことだ。また、来いと念じれば手元に来るらしい。

千夜「よし、決まったわ、神斬刀よ。」
しんざんとう

アリス「私を切らないでね、千夜ちゃん。」

千夜「もちろん、切ったりしないわよ。」
私はそう言つと神斬刀を鞘にしまった。そのとき、結界を何かが突き破った。

？「もろい結界ね、お嬢ちゃん。」

そこには空中に浮遊する女がいた、この結界を簡単に破る奴なんてそうそういない。
。

千夜「あんた、キャスターね、この結界は宝石爺でも簡単には破れないのよ。」

キャスター「察しがいいのね、お嬢ちゃん。」

キャスターは笑いながら、杖を私に向ける。

キャスター「ここであなたは退場よ、私の宗一郎様のために。」

千夜「黙りなさい、キャス子、退場はあんたよ。」
私は無詠唱で干将・莫邪を投影し、投擲する。あっさり躲されたが

それでいい。

千夜「I am the born of my sword（我が骨子はねじれ狂う）」

偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を投影し弓に番えると、キヤス子に狙いを定める。

千夜「これは躲すことができるかしら？キヤス子。」

キヤス子「ただの矢じゃないの、お嬢ちゃん。」

ヒュン、空気を切る音がし偽・螺旋剣がキヤス子に向かって飛んでいく。

キヤス子が詠唱を始めた。一撃で殺す気らしい。

千夜「さよなら、壊れた幻想」
ブローケンファンタズム

私がつぶやくと同時に膨大な魔力が爆ぜる、手応えはあったが、相手はあのキヤス子だ。

キヤス子「なかなかやるわね、お嬢ちゃん、でも残念ね、馬鹿な、後ろから……」

そう最初に投擲した干将・莫邪が私のもとへ戻る途中キヤス子を貫いた、しかし、まだ生きているようだ、しぶとい奴。

キヤス子「たかが、人の身で良くここまでやってくれたわね。」

キヤス子が逃げようとしている、私は無詠唱で複数の剣を空中に投影する、パチン、私が指を鳴らすとキヤス子に向かって飛んで行く、そして、キヤス子に突き刺さる無数の剣、流石に躲せなかったようだ。既にキヤス子の体が消え始めている。そして完全に消滅した。その頃、深山町のどこかで遠坂凜と士郎がお互い対バーサーカーに關してのみ協力すると決めていた。

千夜「何か疲れたわ、もう今日は、お客さんは来ないわよね。」

アリス「千夜ちゃん、あ、あれ。」

アリスが私の後ろを指差し驚いている。私が振り返ると、バーサーカーとイリヤがいた。

イリヤ「お姉ちゃん、強いんだね、キャスターを倒しちゃうなんて。」

イリヤ「私はイリヤ・スフィール・フォン・アインツベルン、よろしくね。」

スカートの裾を持ち、貴族のお嬢様のような挨拶をする、攻撃してくるような雰囲気は感じられない。

イリヤ「今日は挨拶に來ただけ、次あったら、殺してあげる。」

イリヤがそう言いながら微笑む。とりあえず今日は戦わなくて済むようだ。気がつくといリヤとバーサーカーもいなくなっていた。バーサーカーは強敵になるだろう、私はそう感じた。

翌日、結界を張り直した私は、朝食を作っていた、アリスはというと、どこかの腹ペコ王のように、朝食が出来るのを待っている。

千夜「アリス、もうすぐご飯できるわよ。」

今日の朝食は私が腕によりをかけて作った純和風のメニューだ。厚焼き玉子、味噌汁、肉じゃが、胡瓜とタコの酢の物だ、思わず私はつぶやいていた。

千夜「私、いい奥さんになれるかも。」

それを聞いていたアリスが私にこう言い放った。

アリス「なれるわよ、なんなら私がもらってあげてもいいわよ。」

千夜「ア・リ・ス、ちょっとお話しようか。」

私は神斬刀片手に、アリスに詰め寄る。アリスは何かをつぶやいて
いる。

アリス「女神の名において命ずる、武器よされ。」

アリスが詠唱し終わった瞬間私の手元から神斬刀が弾き飛ばされた、
それだけならよかったのだが、一緒に服も脱げていた。

千夜「きゃっ、何するのよ、アリス。」

アリス「あれ、武器のみ弾いたはずなんだけど・・・」

私はとりあえず着替えを取りに私の部屋へ行く途中、玄関がいきな
り開いた。

士郎「千夜いるか・・・、」

千夜「士郎、今、見た？見ちゃった？」

私は士郎に問いたです、だが返事がない、玄関が士郎の鼻血で赤く
染まっている。

千夜「キャー、士郎しかつりして。」

数時間後、貧血から士郎は回復した。

士郎「すまん、千夜、見るつもりはなかったんだ。」

千夜「私もまさか、士郎がくるなんて思わなかったし・・・」

私は少し赤面しながら言葉をつないだ。

千夜「私の下着姿を見たんだから、責任取りなさいよね。」

士郎「ま、待ってくれ、責任と言われても。」

アリス「士郎君観念して、付き合っちゃいなさい。」

士郎「なんでさ。」

千夜「じゃあ、責任取らないつもり？」

私がそう言つと、士郎は逃げ出そうとしている、私はマグダラの聖骸布を投影し、士郎めがけて振りかざす。

千夜「フィーツシュ」

士郎が聖骸布に巻き取られ戻ってきた、その後二時間かけて話し合った結果、一日デートするという約束をした、ほとんどアリスが、決めたのだが。そのデートの時、凜やセイバー、桜に目撃され、修羅場になったのはまた別の話。

トラブルが起きたせいですっかり冷めた朝食を食べ、それが朝昼兼用の食事になった。

アリス「美味しかった、ごちそうさま。」

千夜「おそまつさまでした。」

私は、バーサーカーを探すため、単身アインツベルンの森へと向かった。

気配と魔力を遮断しているため、あちら側に気づかれた様子はない、少し先に城のような建物が見える。あれが、風雲イリヤ城なんだろうか？しばらく歩くと城門のような場所に到着した、潜ろうとしたとき、突然巨大なハルバートが飛んできた、バキッ、私は既のところでハルバートを躲す。

ハルバートは地面に突き刺さっている。どうやら敵は近くに居ないらしい、城門を無事潜ると、その先にメイドが二人いた、おそらくセラとリズなのだろう。

セラ&リズ「侵入者を排除する。イリヤ守るため」

千夜「外野は引っ込んでなさい。」

千夜「約束された勝利の剣」
エクスカリバー

明らかにオーバーキルだと分かっていたが、あえて私は騎士王の宝具を真名開放した、セラとリズは躲すことすらできず塵とかした、後には抉れた地面が威力の凄まじさを物語っていた。
流石にこの城の持ち主も気づいたようだ。

イリヤ「サーヴァントもつれずに来るなんて、無謀ね。バーサーカ
ー殺っちゃえ。」

降り下ろされる巨大な石斧、私はそれをサイドステップで躲す。衝撃波で服が切れる。

千夜「なんて怪力なの、さすが、バーサーカーね。」

千夜「天の鎖」

私がつぶやくとエンキドウの天の鎖がバーサーカーを拘束する。
イリヤ「なんで、バーサーカーの正体を知ってるの。」
私はランクA以上の宝具を投影するため詠唱を開始した。

千夜「体は剣で出来ている、

血潮は鉄で、心は硝子、

幾たびの戦場を超えて不敗

ただ一度の敗走もなく

ただ一度の勝利もなし

担い手はここに弧り

剣の丘で鉄を鍛つ

ならば、我が生涯に意味は不要^ず

この体は、無限の剣で出来ていた」

最強の敵！？（後書き）

作者です、どうも。千夜ちゃん無茶苦茶原作ブレイクしてますね。

千夜「作者、あんたがそうさせているんだと思うぞ。」

作者「うわ、ばれた？」

千夜「読者も気づいてるはず。」

作者「やっぱり」（笑）

千夜「神斬刀で17分割してあげましょうか？」

作者「真祖の姫君と同じかい」

アルク「呼んだ？」

作者「呼んでないよ」

アルク「あつ、吸血衝動が」

カプチュウー

千夜「なんで私の血を吸ってるの？」

アルク「女の子のほう美味しいのよ」

アルク「貴方なら死徒二十七祖に入れるわよ。」

千夜「えー、結構です。」

アルク「残念ね。」

三人「では次回予告」

イリヤ「固有結界？」

千夜「12回死になさい。」

次々にバーサーカーに突き刺さる高ランクの宝具、そして訪れる静寂。

イリヤ「私のバーサーカーが、嫌ー」

千夜「イリヤ、あなたはどっすのかしら？」

イリヤ「私はまだ、死にたくないよ」

千夜「なら、助けてあげるわ。」

次回最強の敵パート2

もしくは急遽、番外編の可能性もあり。

士郎、災難に遭う。そして千夜が勝利宣言する（前書き）

このお話は虎聖杯戦争後のある一日のお話です。
アーネンエルベ前から始まります。

士郎、災難に遭う。そして千夜が勝利宣言する

士郎「千夜、待たせたかな？」

士郎が私に聞いてくる。

千夜「私も今来たところなの。」

ここはアーネンエルベ、新都にある喫茶店だ。私は初めて来るのだが、士郎は来たことがあるらしい。

アリスはマグダラの聖骸布で縛ってきた。邪魔しかねないからだ。

士郎「こんにちは。マスター、」

カレン「いらっしやいませ。」

ジョージ「やあ、士郎君」

凜「あら、衛宮君じゃない。」

桜「先輩、どうしたんですか？」

セイバー「士郎、何故ここに？」

桜、セ、凜「え、星村さん？何で」

ヤバイ、殺気がみなぎっている、私は士郎の腕をつかみ、一気に駆け出した。

士郎「千夜、ヤバイ、後ろから追ってくるぞ。」

私が振り向くとまるで死徒のような形相をした三人が追ってきている。

千夜「士郎、逃げて、私がなんとかする。」

士郎「千夜、危険だ、一緒に逃げるぞ。」

そうこうしているうちに追いつかれていた。

千夜「士郎、覚悟決めなさい。」

士郎「千夜、何するつもりだ。」

私は無詠唱で干将・莫邪を投影した。そして、素早く三人の服のみを切り裂いた。

三人「えっ、アーチャーの剣。」

三人「今何か通ったような、きゃあ」

私がもとの場所に戻ったとき三人の服のみ切れた、その隙を付き、士郎の腕をつかみ深山町に向かい走り去った。

千夜「ここまで来たら、大丈夫でしょ？」

士郎と歩きながら私の家へ向かっていると、金髪の女性に出会った。あれは真祖の姫君、アルクウェイドだろうか？

アルク「ちよつとそのカップルさん？遠野志貴を知らない？」

千夜「誰それ？知らないわ？」

アルク「そう、あら、いい匂いがするわ。」

アルクが私の方に歩み寄ってくる、次の瞬間、カプ、私は首に噛み付かれていた。

千夜「嫌、何するの血を吸わないで。」

アルク「あら、察しがいいわね魔術師さん、貴方の血美味しいわね。」

アルク「これであなたも私と同じ吸血鬼ね。」

こうして、私は死徒にされてしまった。

士郎「大丈夫か千夜？太陽の光当たってるぞ」

千夜「何か暑い。」

士郎「映画とは違うんだな。」

なんとか私の家にたどり着いた私はそのまま眠ってしまったようだ。

朝

千夜「あー、何かだるいアルクのせいね。あれ？何かある？」

それが何か分かったとき私は、赤面してしまった。昨日士郎に抱きついたまま寝てしまったようだ。

士郎「千夜よく眠れたか？」

士郎が私の顔を見つめながら聞いてくる、そして、今の状況に気づいたようだ。

士郎「千夜、俺はなんにもしてないからな。」

赤くなる士郎・・・、よく見ると私は下着姿だった、しかも胸が士郎の腕に思い切りあたっている。

千夜「また、見られちゃった。もうお嫁に行けないわ」

士郎「これは不可抗力だ。」

ドゴーン、吹き飛ぶ玄関、近づく三人の足音、敵なんだろうか、それともあの三人か？

事態はさらに悪い方へ進むみたいだ。あの三人が侵入したようだ。

千夜「士郎、早く、私から離れて、くるわよ。」

士郎「ちょっと待ってくれ、うわっ」

士郎が慌てて離れようとしたため、布団につまづき、私の方に落ちてきた、そして士郎に押し倒されるような体勢になってしまった。そして開く襖、修羅場が訪れた。

三人「士郎（セイバー）、衛宮君（凜）、先輩（桜）、朝からお盛んね。」

士郎「違う、これはアクシデントだ。なあ、千夜。」

千夜「聞こえてないみたいよ。戦うわよ」

千夜「アリス、いる？」

アリス「んーんー」

千夜「あっ、縛ったままだった。」

私はマグダラの聖骸布を消した、そしてアリスを再び呼んでみる

アリス「千夜ちゃん、こういうプレイが好きなら、言ってくれればいいのに。」

千夜「アリス、服持ってきてくれる？」

私は片手にチャクラムを投影しお願いした。

アリス「わかりました、千夜お嬢様」

ものの数秒でアリスが昨日来てたのと同じデザインの服を持ってきた。

急いで着替えると士郎をアリスに頼み、庭に出た。

千夜「さて、かかってきたら？」

その言葉と同時にセイバーが斬撃を放つ、私はそれをチャクラムでいなし、後ろに飛ぶ。

セイバー「なつ、なかなかやりますね」

凜「嘘、セイバーの攻撃を躲した？」

驚きながらも凜がガンドと魔力の詰まった宝石を放つ、私はジャンプし上空から投影した黒鍵を投擲する。さらに凜が驚く。

凜「代行者なの？ 厄介ね」

千夜「代行者ではないわよ。」

私は接近し凜の鳩尾へ膝蹴りを食らわす、桜が怒りを露にする。

桜「よくも姉さんを、そして私の先輩をとったわね。」

千夜「嫉妬してるの?」

桜「!!」

私は桜にCQCを食らわせ気絶させる。セイバーはというと私に対し剣を構え隙を伺っている。

セイバー「そこっ」

私がわざと隙を作ると誘いに乗ったセイバーが切りかかってきた。私は神斬刀を抜くと魔力を通した。スパツ、セイバーの髪が切れる。

セイバー「何故、髪を、今の状態なら私を討てたはずです。」

千夜「殺す必要ないからかな。」

セイバー「私の負けですね。」

ガツクリと肩を落とすセイバー、こうして第一次士郎争奪戦は幕を閉じた。

千夜「これで士郎は私のものね。」

士郎「結局デートでは責任取れないのか。」

千夜「私の下着姿を二回もみて、一緒の布団で寝て、押し倒したんだから当然よ。」

こうして、千夜が本来、凜やセイバーが至るはずだったポジションに収まった。

士郎、災難に遭う。そして千夜が勝利宣言する（後書き）

作者です、今回は番外編を書きました。いかがでしたでしょうか？

千夜「作者、なんで私が死徒化してるのよ？」

作者「アルクに吸血されたじゃん」

千夜「何かいろいろな設定を端折ってない？」

作者「月姫はあまり詳しくないのだよ。」

千夜「偉そうに言うな。貴方も死徒になりなさい」

作者「遠慮しとくよ。」

士郎「見つけたぞ。作者」

作者「げっ。士郎、いや、アーチャーか？」

千夜「作者、あまりネタバレさせない。」

士郎「なんで俺が、あんなひどい目に合うんだ。」

作者・千夜「原作でもそうだったじゃん。じゃない。」

士郎「確かに、いつも遠坂にはガンダ撃たれたりしていたけど。」

士郎「その前に作者死ね。壊れた幻想」

ブロックファンタズム

作者「うわあ、」

士郎「殺ったか？」

作者「甘い、熾天纏う七つの円環」

ローアイアス

士郎「なんでさ、作者までその技使うの？」

作者「士郎、君には別の世界へ行ってもらおう」

士郎「宝石剣ゼルリツチ！！なんでここに」

士郎「次こそは　　！！」

次回予告

いよいよ、最強の敵編完結か？

それとも、もつと厄介になるのか

最強の敵！？ part 2（前書き）

感想が入ってました、つまらないとのこと。しかし私の心はガラスでは出来ていません、なのでこれから、つまらない小説を連載させていただきます。

では最強の敵！？ part 2 始まります。

最強の敵！？ part 2

千夜が詠昌を終えると。周辺の景色が塗り替えられる、赤い荒野に突き刺さる無数の剣。

「固有結界、そんな」

イリヤが驚愕する、そんなイリヤに私は告げた。

「いくらバーサーカでもこれだけの高ランクの宝具には耐えられないでしょうね。」

「死になさい、バーサーカー」

私は複数の高ランクの宝具をバーサーカーへ射出する、肉を切り裂く音が当たりに響く。

そこには串刺しになったバーサーカーがいた、もうすぐ消えゆくところだった。

「私のバーサーカーが殺されちゃった。」

イリヤが寂しそうに呟く。バーサーカーはもう居ない。私はイリヤに問いかける。

「イリヤ、あなたはどうするの？」

「えっ、殺さないの？」

「殺す気があれば、とっくに貴方は死んでるわよ。」

千夜とイリヤが会話をしていると、そこへ士郎と遠坂 凜、そして彼らのサーヴァントが到着する。

「えっ、千夜？」

士郎が私に気づく。その声に遠坂 凜も気づいたようだ。

「何で、星村さんがここにいるのよ、衛宮君。」

「私がここにいる理由？ バーサーカーを倒しに来たのよ。」
千夜の言葉に驚きを隠せない二人。さらに千夜が続ける。

「バーサーカーは倒したわよ、それとも、私と戦う気かしら？」
凜がその言葉に答える。

「サーヴァントなしでどうやって、バーサーカーを倒したのかしら？ 星村さん？」

「さあて、あなたに教えると思う？」

私は凜の質問に答えなかった。凜は私へ攻撃をする様子はない。後ろの錬鉄の英雄もだ。

「士郎、貴方は、どうするの？ 戦うの？」

私は士郎に問い掛ける。

「俺は、戦わない。千夜は女の子じゃないか。」
その言葉に錬鉄の英雄が言葉をはさむ。

「衛宮士郎、貴様は甘すぎる。」

確かに士郎は甘い、この場に及んで私を女の子扱いするなんて、とてもマスターのすることじゃない。

騎士王も何か言いたそうだが、抑えているようだ。長い沈黙が場を支配する。その沈黙を凜が破った。

「はいはい、もう興ざめだわ、帰りましょう、アーチャー、衛宮君。セイバーもいいわね。」

仕方なく頷く三人、そして彼らは去っていた、さり際、凜がこう言い残した。

「次、会うときは、敵同士、今回のようなことはないわ。」

その言葉に、答える私。

「ええ、そうね。」

彼らの姿が遠くへ離れ、見えなくなったのを確認しイリヤに告げた。

「イリヤ、私の家に来ない？あなた一人ぐらい面倒見るわよ。」

イリヤが聞き返してくる

「本当にいいの、さっきまで敵同士だったんだよ？」

私は答える。

「ええ、構わないわよ。」

その言葉を聞きイリヤに笑顔がもどる。

「本当？ありがとうお姉ちゃん。」
こうして、千夜の家に戻り、イリヤが暮らすことになった。

最強の敵！？ part 2（後書き）

ども作者です。千夜ちゃんの家には妹が増えましたね、バーサーカーに関しては、倒し方が金ぴかさんと似てましたが、気にしないでください。

「ねえ、作者？」

「何かな、千夜」

「何でセリフの前の名前が消えてるの？」

「うーん、読みにくいかと思ってね。」

「へー、」

「それと、イリヤが妹になってるんだけど。彼女私より年上よね確か。」

「設定ではそうだったね、でも妹ぽいじゃん」

「確かにね。」

「それでは次回以降の予告」

イリヤを引き取った千夜に、一時の平穏が訪れる。

そこへ士郎が訪ねてくる。何か思惑があるようだが？

凜はアーチャーと行動を開始する、そこで不思議な女性に出会う。

士郎 千夜にケーキづくりを教える。（前書き）

どうも作者です、今回は千夜とイリヤの平穏な日々？をお送りします。

士郎 千夜にケーキづくりを教える。

バーサーカーとの戦いから2日たった、イリヤを引き取った私は、つかの間の平穏な日々を送っていた。

アリスは女神としての仕事があるからと言い残し、自分の世界へ帰っていった。

「お姉ちゃん、お腹すいたよ」

イリヤが居間から私に声をかける。

「イリヤ、ちよつと待っててね、今作ってるからね」

私が今作ってるものはイリヤが家に来た記念にケーキを作ってるのだが、慣れない作業の為、手こずっている。玄関でチャイムの音が鳴る。

「イリヤ、ごめん、出てくれる？」

「はあい、お姉ちゃん。」

「あなた、何しにきたの？」

玄関からイリヤの怒気を含んだ声が聞こえてくる。私が玄関に行ってみると、そこには士郎がいた。

「よつ、千夜」

「士郎、貴方は魔術師の家へサーヴァントもつれずにきたの？」

士郎がその問いに真面目な顔をして答える。

「俺は、千夜や遠坂とも、戦うつもりはないぞ」

私とイリヤはポカーンとしてしまった。

「士郎、あんた、死ぬわよ。そんなこと言ってる・・・」

「千夜や遠坂が戦うというなら、俺が二人のかわりに戦うさ。」

「ちよつ、セイバーはそれでいいの？聖杯を得るために召喚されたのよ。」

「セイバーは俺が説得するよ。」

士郎はそんなことを平然と言ったのける。

「ところで何かようなの？」

「ああ、この前の肉じゃがを作りに来た。」

「あの時の？別にいいのに。」

「千夜、台所借りるぞ。」

士郎はそう言うと言った家の中に入って行った。

「千夜、ケーキ作ってたのか？」

士郎の問いに私はしまったと思いながら、返事をする。

「ええ、まあね、イリヤのためにね」

「これじゃ、うまく焼けないぞ、俺が教えてやるよ。」

士郎は今なんと言ったのだろうか？私は理解できずにいた。

「千夜、早く来いよ。」

士郎が私の手を握り、台所へと連れていく。その様子を見ていたイリヤが私に言った。

「お姉ちゃん、顔赤いよ？」

イリヤが私の顔をにやけながら、覗き込んでいる。イリヤは白い悪魔とかしていた。

「ちよつ、イリヤ、後で覚えときなさいよね。」

それから私は士郎という料理人にケーキの作り方をみっちりと仕込まれた。

「出来たわよ、イリヤ。」

「待ちくたびれたわよ、お姉ちゃん」

「でも、お姉ちゃん楽しそうだったわよ。」

イリヤが私が士郎とケーキを作っているとところを見ていた感想を言ってきた。私は赤面してしまい言葉が出てこなかった。

「また、顔が赤くなってるわよ、お姉ちゃん。」

「そ、そんなことないわよ、ねえ、士郎？」

「千夜、顔が赤いな、熱でもあるのか？」

士郎が、私のでこに自分のでこを合わせる、その途端、私はさらに赤面してしまい、その場にヘタリ込む。

「千夜、大丈夫か？さっきより顔が赤いぞ。」

「士郎があんなに顔を近づけるからよ。」

イリヤが私の返答を聞いて白い悪魔の笑みを浮かべる。私はしまったと思ったが遅かった。

「士郎お兄ちゃん、お姉ちゃんはキスされるかと思ったんだって。」

「ちよつ、イリヤ何を言ってるの?」

私は赤面しながらイリヤに聞いてみる。

「あは、ほんとにそう、思ってたんだ?」

イリヤがさらに白い悪魔へと変貌していく。

「イ・リ・ヤちゃん、私をからかうのもいい加減にしなさい。」

私は干将・莫邪を投影しイリヤに向ける。

「私を怒らせた責任取ってもらうんだからね。」

イリヤが私の殺気にひるみ、逃げようとする。そして士郎は私を止めようとする。

「千夜、待て、イリヤが怖がってるじゃないか。」

「問答無用」

士郎が私の前に立ちはだかる、手には私と同じ干将・莫邪が握られている。そして思いがけない行動にでた。士郎は私に抱きつきキスをした。

「.....!!」

私はびつくりして、干将・莫邪を落としてしまう、そして士郎が私に聞いてきた。

「えっ、.....」

「正氣に戻ったか?千夜」

士郎の言葉に正氣を取り戻すが、私は士郎にされたことにびつくりしていた。

「今、何したのよ?」

「何って、キスだよ。」

士郎は平然と答える。私は少し考えていた。

「士郎、よくも、私のファーストキスを奪ったわね。」

「すまん千夜、こうするしか千夜を止めれないと思ったんだ。」

士郎が謝罪してくる。私は士郎に一言告げる。

「いいわ、許してあげるわ、でも私のファーストキスを奪った責任は取ってもらうんだからね。」

「な、前も似たようなことがあった気がするぞ?」

「士郎、貴方は私のものなんだからね。」

私がそう言つと、士郎が何かを言っている。

「あの、千夜、性格変わってるぞ。」

そこへイリヤが戻ってくる。

「お姉ちゃん、士郎が怯えてるよ、何があったの?」

「士郎がね、私のファーストキスを奪ったの。」

イリヤがご愁傷さまと言うような目で士郎を見ている。

「士郎、責任取らないとだめだよ。」

「なんでさ。」

士郎がお決まりのセリフを叫ぶ。この後、士郎は星村家に24時間拘束されたという。

士郎 千夜にケーキづくりを教える。(後書き)

どうも作者です。いやー、怖いですねー、女性は・・・

「作者、教えてくれ、俺このあとどうなるのさ？」

「知りたいかね、衛宮君」

「ああ。」

「ご愁傷さま。そしておめでとう。」

「おい、作者、それはどういう意味だ」

「フィッシュ」

「あつ、士郎が消えた。」

「作者助けてくれー」

「無理だ、」

「がんばれー士郎」

てなわけで次回予告

今回は凜とアーチャーが会合する不思議な女性編になるはずですよ

アーチャーVS式（前書き）

ども、作者です、今回はアーチャーVS式です。

アーチャーVS式

一方、凜とアーチャーは、新都で両義式と対峙していた。響く剣戟、死線を的確に、突こうとする式、それを、干将・莫邪で弾き、切り込むアーチャー。

「英霊相手に、あそこまで戦えるなんて、何者よ？」

「凜、よける」

「えっ……」

式の日本刀が凜の死線を断ち切ろうとしている。その前に飛び出すアーチャー。

「チツ……」

式の日本刀がアーチャーの右腕を切り落とす。

「アーチャー、大丈夫？」

「凜、無事か、私の右腕はダメなようだ、早く逃げろ」

「えっ……」

「逃げろと言っている。」

アーチャーが叫ぶその背後から式がアーチャーの死線へと切り込む。
「貴様を道連れにしても、マスターを守ってみせる。」

「I am the born of my sword（我が骨子は

ねじれ狂う)」

偽・螺旋剣をを投影する、アーチャー。目の前に迫る式。偽・螺旋剣を投擲するアーチャー。

アーチャーの死線を切り裂く式の日本刀、アーチャーが偽・螺旋剣を破壊する。

フロークンファンタズム
「壊れた幻想」

爆ぜる膨大な魔力、凜がその音に気づき叫ぶ。

「アーチャーが……」

爆炎がひいたあとアーチャー、式どころにもそこには居なかった。

「令呪が消えた……、まさかアーチャーがやられるなんて……」

凜は呟き、全速力で走り出す。

この戦いで、錬鉄の英雄は死んだかに見えたが、最後の魔力を使い、星村家にたどり着く。

私が士郎に先程の件について話していると。庭から声がする

「千夜、凜を頼んだぞ、私は間もなく消える」

「ちょっと、アーチャー、誰にやられたの？」

「着物を着た小娘だよ、どうやら、直死の魔眼持ちだったようだな。」

私はそれを聞き誰かは検討が付いていた。

「で、そいつは仕留めたの？」

「手応えはあった、仕留めたはずだ」

そう言い残し、アーチャーは消えて行った。

「さよなら・・・アーチャー」

式は新都の路地裏で子猫のように体を丸め絶命していた。最後の瞬間未来予知を使い、直撃は避けたが、かなりのダメージを受け、路地裏までたどり着き力尽きたのだった。凜は深山町の星村家の前に立っていた。

「こんばんは・・・」

「はあい、どちら様ですか？」

「

「星村さん、こんばんは」

玄関にはとアーチャーのマスターだった、遠坂 凜が立っていた。

「アーチャーが・・・、やられたの」

「アーチャーなら、さつき家に来て、力尽きて消えたわ。」

「凜を頼むだつて。」

私は少し涙ぐみながら、凜にアーチャーの最後の言葉を伝えた。凜は少し落ち着いたようで、紅茶を飲みながら私と土郎が作ったケーキを食べている。

「所で、衛宮君は、何で千夜の家にいるの？」

その問いにイリヤが、にやけながら答えようとする。

「それはね……むぐう」

イリヤは私に口にケーキを詰められ、沈黙する。
そして士郎が答える。

「それはだな遠坂、ケーキ作りを教えてただけだ。」

「そうよ、私が苦戦してたら、イリヤが呼んできてくれたの。」

私と士郎はキスの件は伏せて、凜に伝えた。

「そう」

何故か凜が怒ってるように見える。

「私は、かえって寝るわ。」

「おやすみ、衛宮君、星村さん。」

アーチャーVS式（後書き）

戦闘シーンがかなり曖昧になってしまいました。

アーチャーと式、二人とも退場になって、残るは、セイバー、アルク、ランサー、ギルですね。

どうやって戦わせよう？少し更新が遅れるかもです。

「作者、千夜が主人公なのはわかるが、もう少し出番があってもよかったのではないかね？」

「あつ、英霊エミヤ。」

「オレも居るぞ。」

「式、なんで二人とも獲物を構えてらっしゃるのかな？」

「お前が一番知ってるだろ。」

「確かに、逃げよ」

「逃がすか。」

「約束された勝利の剣」
エクスカリバー

斬り決る戦神の剣」
フラガラク

「なんでさ。」

てなわけで次回予告といきたいのですが。

次話の構想がまとまってないので、番外編が投稿されるかもなのです。

星村家の平和な一日！？（前書き）

どうも作者です、今回は全く戦闘はありません。では楽しみくだ
さいまし。

星村家の平和な一日！？

凜が帰った後、士郎と千夜は安堵の溜息を漏らす。

「なんとか遠坂にはバレなかったかな。」

「そうね、凜には気づかれる訳には、いかないわ。」
士郎と千夜がこんな会話をしている、それを不貞腐れた様子で聞いている。

「イリヤ、さつきは悪かったわね、ケーキで口を塞いで。」
それにイリヤが答える。

「窒息するかと思ったわよ。」
イリヤはやれやれという感じで、皮肉る。

「いつそのこと付き合っちゃえばいいのに。」
イリヤが小悪魔的な笑みを浮かべている。それを聞き赤面する千夜と士郎。

「ちょっと、イリヤ、何を言ってるの？」
私は赤面しながらイリヤに注意する。その様子に気づいたイリヤがさらにニヤニヤする。

「顔を真っ赤にしながら注意しても、説得力ないよ、お姉ちゃん。」
私はそこを指摘され、恥ずかしくなり、居間を出て、自室へと戻った。

「お姉ちゃん、可愛いんだから。」

千夜の居なくなった、居間でイリヤが呟く。士郎はというと、何かを呟いているようだ。

「千夜と俺が付き合う・・・？」

「確かに千夜はかわいいし、好きだけど・・・」

「高嶺の花だな。」

士郎のこの呟きを影でこっそり聞いていたものが二人いた、イリヤと女神の業務が終わって帰ってきたアリスだった。

「イリヤちゃん、協力して二人をくつつけるわよ。」
アリスがイリヤに協力を求める。

「了解だよ、アリスお姉ちゃん。」
どこで覚えたのかイリヤがアリスに向かいビシッと敬礼している。
こうして、イリヤ、アリス、両名による、史上最大の作戦が始まった。

一方。千夜はというと自室で悩んでいた。

「士郎は確かに好きだけど、私が士郎と付き合うと・・・」

「原作ブレイクしちゃうんだよね・・・」

千夜はこんなことを悩んでいるのだが・・・。

「でも、私かなり、今まで原作ブレイクしてるわね。」

それもそのはずだ、星村千夜自体この世界には元々存在しない。なぜなら千夜は転生者なのだから。

「よし、決めた、私は士朗を私のものにしてみせる。」

このときこの家の誰もが気付かなかった、あの赤いセイバーの皇帝特権が発動したことに・・・

千夜の決心は揺るぐことなく、士郎は完全にロックオンされていた。翌朝、千夜が自室から出ると士郎は居なかった。居間にはイリヤとアリスがいる。

「おはよ、あれ、アリスお帰り。」

「ただいま、千夜」

私がアリスに告げると、明るい返事が帰ってくる。また抱きついてくるのかと思ったが、それはなかった。

「アリス、まさか、あんた、イリヤを毒牙にかける気じゃ？」

「えー、非道い、私は冗談でやってたんだから、百合ではないわよ。」

「そう、それなら、いいけど。」

アリスのその言葉を聞き、一旦安心した千夜だったが、ふと新しい、不安に駆られる。

「まさか、士朗を狙うつつもり？」

私はアリスに問いたです。アリスは絶対にそんなことないと言うような目で訴えている。

「絶対にそんなことはないわよ、千夜。」

「そう、それなら、いいけど。」

私はアリスの返答を聞くと朝食を作り台所へと向かう。
千夜がキッチンへ向かった後、イリヤとアリスがひそひそ話を始める。

「アリス、千夜お姉ちゃん、士郎を気にかけてたよね。」

「そうね、私に質問した時の目は殺気がみなぎってたしね。」

「今度、士郎と千夜お姉ちゃんを二人きりにしてみようか？」

「そうね、よし、作戦開始よ。」

千夜はというと、台所で居間の方から不穏な気配を感じていた。

「二人ともなんの話、してたのかしら？」

「ご飯できたわよ。」

千夜が二人に話しかける。

「ただの雑談よ。私のこととか。アリスのこととか。」

「そうなんだ、馴染んでくれてよかったわ。」

私は笑顔で二人を見ながら朝食を食べていた。

「お姉ちゃん、後で、アリスと新都に買い物に行ってくるわ。」

「何、買いに行くの？」

「服よ、お姉ちゃんが私の部屋を吹き飛ばしたから、服がなくなっただけだからね。」

イリヤがそう言うと、千夜の顔が青ざめる・・・

「あの時ね・・・」

あの時とは、千夜がアインツベルン城で二人のメイドを約束された勝利の剣で吹き飛ばした時のことだ。
エクスカリバー

「イリヤ、ゴメンね、ゆつくり選んでおいで、お金は持ってるの？」
私はイリヤに謝罪し、お金について聞いてみた。

「お金は大丈夫よ、スイス銀行にたんまりあるから。」

私は少し驚いた、スイス銀行って確か、セレブや一部の認められた人しか口座すら持てない銀行のはず。

「イリヤって、お嬢様だったのね・・・」

改めてイリヤがお嬢様だったことに気づく千夜、そして、二人は出かけていった。

二人は、衛宮邸へ来ていた。

「士郎君いる？」

アリスが玄関先で士郎を呼ぶ、その声に応じて出てきたのは、かの騎士王だった。

「アリスに、イリヤ・スフィール、何用ですか？」

「セイバー、どうした？」

士郎が奥の方から顔を出す。

「あつ、士郎君、ちょっとこつち来てくれるかな。」

アリスが士郎を呼ぶ。士郎が玄関先へ出ようとすると、セイバーが立ちはだかる。

「士郎、何か嫌な予感がします」

セイバーが断言する。ここに千夜がいたならさすが直感スキルランクAと言っだろう。

「仕方ないわね、あまり使いたくないけど」

アリスが何かを呟く

「女神の名において命じる、我が対象とすべき物を捕縛せよ。」

アリスが高速神言で魔術を発動する・・・

「対魔力ランクAの私には効きません・・・馬鹿な？」

セイバーはあつという間に拘束されていた。

「セイバーさん、ゴメンね、士郎君借りていくわね。」

アリスはそう呟き、セイバーに謝罪する。

「アリス・・・、これを解きなさい」

セイバーの咆哮が無人となつた衛宮邸に響く。

「アリス、イリヤ、なんのようなんだ？セイバーを捕縛しなくてもよかったのに。」

士郎がアリス達に話しかける。

「セイバーさんがいたら、ダメなのよ。」

「今から千夜のところへ行って欲しいの。」

「なんでさ？」

士郎が聞き返す。かなり、警戒しているようだ。

「お姉ちゃんが士郎とお話したいんだって。
イリヤがそう答える。」

「分かった、で二人はどこ行くんだ？」

「新都へお買い物よ。」

にこやかに去っていくアリス達を見送る士郎。そして、星村家の前に立ち、玄関を開ける。

「千夜いるか？」

士郎が千夜を呼ぶ、返事はない、自室にいるのだろうか？士郎は玄関で靴を脱ぎ、家にかかる。

「お邪魔します。」

家になると、居間には千夜は居なかった、士郎はもう一度千夜を呼んでみる。

「千夜、居ないのか？」

その時奥から物音が聞こえてきた、士郎は音のした方へ向かった。

「ん？ここはなんだったかな？」

士郎が扉を開けると、そこにはバスタオルのみ巻きつけた風呂上りの千夜がいた……。

「し、士郎。どうしたの？」

千夜が士郎に問い掛ける。その時千夜にとって最大のピンチが訪れる……。

千夜の巻いていたバスタオルが取れてしまい、千夜の一糸まとわぬ姿を士郎が見てしまった。

「きゃあ、士郎見ないでよ。」

士郎はというと、目の前で起こった、ハプニングに固まっていた。そして、卒倒する、千夜が投げた洗面器が頭に直撃したのだった。

「士郎に裸を見られちゃった……、って士郎何で倒れてるの？」
士郎が目覚めたのはそれから、30分後だった。

「大丈夫士郎？頭なんともない？」

「少し痛みはあるが大丈夫みたいだな。」
士郎が答える、そして千夜は士郎に聞いてみた。

「そつえば、なんで家にいたの？」
千夜が聞いてきたことにきよんとする士郎。

「それはだな、アリスたちが千夜が話たがってるて、俺を呼びに来たからだよ。」

その言葉を聞き、今度は千夜がきよんとする。

「私、そんなこと言っていないわよ？」
士郎と千夜は、アリス達にまんまとはめられたのである。しばらくして、二人は衛宮邸へと行き、セイバーを縛めから解き放つ。

「千夜、二人はどこへ行きましたか？」
セイバーに詰め寄られる千夜、止めようとする士郎。だがつかんだ

場所が悪かった。

「ん、何か柔らかいものが？」

士郎は自分の手元を見て青ざめる・・・

「士郎、あなたという人は白昼堂々、どこを触ってるのですか？」

一瞬で鎧姿に変わるセイバー手には風王結界で見えないが約束された勝利の剣が握られて^{エクスカリバー}いる。

「士郎、そこになおりなさい。」

セイバーが怒りを露わにしながら、士郎に詰め寄る。

「待て、セイバー、話せばわかる・・・」

セイバーの纏う魔力が瞬時に増加する。

「セイバー待ちなさいよ、そこで宝具なんて使ったら、家が吹き飛ばわよ。」

千夜がセイバーを宥める。

「ご飯食べれなくなるわよ。」

「私としたことが、つい怒りに我を忘れてしまうなんて。」

セイバーがしょんぼりする。

星村家の平和な一日！？（後書き）

いやー、千夜と士郎、見事にアリス達に騙されました……。セイバーがキレルとほんとに怖そうですが。正直命が幾つあっても足りませんね。

「作者殿、あの最後の終わり方では、私が腹ぺこキャラみたいではないですか」

「セイバーさん、いつきたのかな」

「先程からいましたが？」

「あの、何で鎧を来てらっしゃるのですか」

「本編で晴らせなかった怒りを作者殿にぶつけようかと……」

「目が座ってるよ、セイバー」

「問答無用です、そこになおりなさい。」

「三十六計逃げるに如かず」

「約束された勝利の剣」
エクスカリバー

「ギャー……」

「晴らせぬ恨み晴らしましたよ、皆さん」

「甘いわ、セイバー」

「まさか、直撃のはず・・・」

「流石に固有時制御は体に負担がかかる・・・」

「桐嗣ですか、あなたは・・・」

「てなわけで、次回予告」

まだ星村家編のまま、続きます・・・

だいたいどうなるかは予想が付きますよね？

えーと士郎は次回でとうとう、何かを決心しちゃいます。

「そうだよな、責任は取らないとな・・・」

「本当？士郎」

嘘です多分、士郎は鈍感なのですが、それは原作、これは二次創作なのでどうなることやら？

「では、次回おたのしみにね」

「千夜、俺のセリフを取るな」BY作者

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0909y/>

転生者は原作ブレイクしました

2011年11月10日02時13分発行